

「末の日」と「終わりの日」の相違点

聖書預言の中に「終わりの日」とか「終わりの時」という言葉が数多く使われていますが、例えば、ミカ4：1の「末の日」（口語訳、新世界訳）と訳されているヘブライ語は、「バ・アハーリートハイヤーミン」と記されており、この単語の語根はそれぞれ アカーリース、 ヨームであり、英語ではLast daysと訳されています。

「最終部分の日々」という意味です。結論的な事を先に述べることとなりますが、ヘブライ語聖書の中でこの「末の日」（ヘ語：アカーリース、 ヨーム）と表現される場合、それは基本的に（ハルマゲドン前）の「終わり」の事ではなく、神の創造の安息日の「最終部分の日々」つまり千年王国時代に成就する事柄として述べていると捉えてほぼ間違いないと思います。

「末の日」という表現が出現する聖句は次の通り：

イザヤ2：2。 エレミヤ23：20、 30：24、 48：47 49：39。 エゼキエル38：16。 ダニエル2：28、10：14。 ホセア3：5。 ミカ4：1。

これらの用法から、ほとんど共通しているのは、「末の日」に起きる事は、「ユダヤの民を散らされた地から必ず、呼び戻し、イスラエルに住まわせる。みな流れのようにエホバの山（家）に向かう。異邦諸国民も神を認め、エホバにまみえようとする。」という、約束され続けたきた預言が成就するときであると示しています。

（この点で例外的と思えるダニエル書については、後で詳述します。）

一方、ヨエル書など、ハルマゲドンに直結する「終わり」のことは「主（エホバ）の日」という表現で記されています。

「主（エホバ）の日」について述べている聖句は次の通り：

イザヤ2：12、13：6、9。 エゼキエル13：5、30：3。 ヨエル1：15、2：1、2：11、3：14。 アモス5：18。 オバデヤ15。 ゼパニヤ1：7、14。 ゼカリヤ14：1。

「末の日」が、「千年王国での記述である」というのは、ハルマゲドンの裁きの後、平和を回復した地において、イスラエルが神からの祝福を実現する出来事だからです。その典型的な一例を挙げておきましょう。

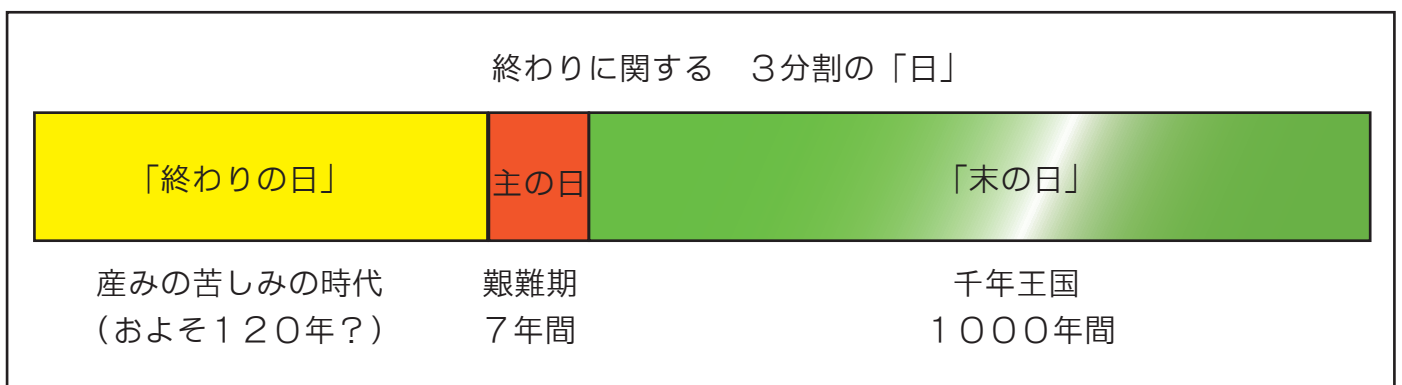
「見よ、エホバの風あらし、激しい怒り、吹き進む大あらしが出て行った。それは邪悪な者たちの頭上に渦を巻く。エホバの燃える怒りは、ご自分の心の考えを成し遂げて、遂行するまで元に戻らない。末の日にあなた方はそれに考慮を払うであろう。その時と、エホバはお告げになる、「わたしはイスラエルのすべての家族にとって神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。エホバはこのように言われた。「剣を免れて生き残った者からなる民は荒野で恵みを得た。イスラエルが自分の休養を得ようとして歩いていたときに」。遠くからエホバがわたしに現われて、言われた、「そして、わたしは定めのない時に至る愛をもってあなたを愛した。それゆえに、わたしは愛ある親切をもってあなたを引き寄せたのである。」（エレミヤ 30:23 - 31:3）

「末の日」は千年王国時代と述べましたが、実は、厳密に言うと、「エホバの日」（世の終わり）の最後にハルマゲドンがあり、神の王国が、それから千年に渡る支配を開始してゆくことになっていますので、「末の日」はその差し示す期間として大患難期をも含んでいるという認識で書き記されている記述もあるかも知れませんが、すでに述べましたように、イスラエルの回復の成就期が「末の日」に起きると預言されていますので、「末の日」の目的そのものと、「世の終わり」との同一視などの混乱を敢えて避けるために、基本的に、そのようなとらえ方で良いのではないかと思います。

言い換えますと、ものみの塔も含め、一般の聖書預言解説は、この「末の日」と「エホバの日」（世の終わり）を混同してしまっているために、預言成就のビジョンに矛盾や混沌とした部分が見られる原因になっていると考えられます。

例えばヨエル書の「主（エホバ）の日」に関する記述が、使徒2章に引用されていますが、そこでは「終わりの日」（ギ語：エスカター ヘメラ；Last days）と記述されていたり、旧約の「末の日」（アカーリース、ヨーム）が「終わりの日」と訳され、ハルマゲドンに至る艱難期（終わりのしるし）、そしてその以前の「産みに苦しみの期間」とされる、最終的な時代についても、「…終わりの日にはあざける者たちがあざけりを抱いてやって来る…」（ペテロ第二 3:3）。「…終わりの日には、対処しにくい危機の時代が来ます。」（テモテ第二 3:1）などのように記述されていることから、この3つの異なった期間が同一視され判別が付かなくなってしまうために、聖書預言の理解に無理なコジツケが入り込んでしまっているだろうと思います。

一例を挙げれば、終末預言に関するほとんどの書物の著者、研究者は、ハルマゲドン前に各地からユダヤの民が帰還してくると考えています。そして神殿を建てると考えています。ともかくこの「しるし」が見えない限り、終わりはまだだと、考えているようです。



「エホバの日」に諸国民が一斉にイスラエルに向かいます。ヨエルや、ダニエル書に記されている通りです。言わばそれは神の畏です。そこで引き起こされるのが、ハルマゲドンです。ミカやイザヤにあるような、神を認めて、神の民に連なって、神を求めるためにイスラエルに向かう者など、その時点では誰もいません。全く正反対の動機を抱いて集まって来るのです。

ダニエル書の「末の日」とは—

さて「末の日」という表現が用いられている記述の中で、少し異例なのがダニエルの2箇所の記述です。ダニエル2書のネスカドネザルの金の像に関する記述と、10章の南の王と北の話しの部分です。

先ず、2章の「末の日」に関してさらに調べてみましょう。

「…天に神が、秘密を明らかにされる方がおられます。その方が、末の日に起きるはずの事柄をネスカドネザル王にお知らせになったのです。あなたの夢、また床の上でのあなたの頭の中の幻、それはこうです。」(ダニエル 2:28)

「末の日に起きるはずの事柄」とはいったい何でしょうか。

金、銀、銅、鉄（後に粘土が混ざる）という4種類の金属からなる巨像で、金の頭はネスカドネザル王自身だと言われています。

「そして、あなたの後に、あなたに劣る別の王国が起こります。…(ダニエル 2:39)

という風に順に説明されてゆきます。

それで、この金の像はいつから存在するかというと、この出来事のその時点から（その時はまだ頭だけですが）存在します。

では「末の日」に起きるはずのことの中に「ネスカドネザル（バビロニア）の支配」が含まれるのでしょうか。「末の日」に像が造られるのでしょうか。そのようなことはありません。

厳密に「末の日」に起きること、それは、石が像を倒して全地に満ちるという出来事です。

この預言は、「倒して終わり」ではありません。石は山となってその後「定めのない時に至る」という預言を含んでいます。

「…像を打ったその石は、大きな山となって全地に満ちました。」(ダニエル 2:35)

「…それらの王たちの日に、天の神は決して滅びることのないひとつの王国を立てられます。そして、その王国はほかのどんな民にも渡されることはありません…それ自体は定めのない時に至るまで続きます。」(ダニエル 2:44)

それで「末の日」に起きることというのは、単に「エホバの日」に諸国が裁かれることだけを示しているのではなく、むしろ、その後が重要で、その王国は千年にわたり人間的な政府を超越した働きをするということを示しているのです。

さてでは次に、10書の記述ですが、こう書かれています。

「…そして今、末の日にあなたの民に臨む事柄をあなたに悟らせるためにやって来た。それはなお[来たるべき]日々にかかわる幻なのである」。(ダニエル 10:14)

ここで、み使いは、単に「末の日に起きる事を伝えに来た」とは述べていません。末の日に起き

る事を、「悟らせるために」ということです。それは、つまり、起きる事柄の出来事だけでなく、その意味する所をダニエルに理解させるということです。

これは「[ペルシャの王キュロスの第三年](#)」のことでした。(10:1)

そして、み使いはすぐに本題には入らず、内輪話というか、自らの経験談から始まります。

そのみ使いは、この情報を伝えるために来るとき、「ペリシテの君」に21日間も妨害された事、そのためミカエルが救助に来てくれたこと、その後すぐ、ペルシャの君と戦うために戻る予定である事、そして、そこに「ギリシャの君」もやってくることなどです。

(つまり、ダニエルにこの話しをしている間も、おそらくペリシテの君とミカエルは抗争状態にあったと考えられ、それで用事が済み次第、すぐに戻る必要があったのでしよう)。

これらの付加情報は他に例を見ない非常に珍しいケースです。

しかし、これらの経緯をダニエル伝える理由、目的はいったい何だったのでしょうか。

そうした事情がなければ21日も前に、この情報が自分に知らされたはずである事が、まず分かります。確かに、それが、み使いにとってさえ容易ならぬ事、困難を極めてたということは、その音信の内容が尋常なことではないことを物語りますが、しかし、驚くべき預言はこれだけではありませんから、これだけは例外ということも考えにくく思えます。

こうした「[霊者たちの抗争](#)」やメッセンジャーとしてみ使いの働きも決して楽じゃないということは、この情報のおかげで初めて知りましたが、そうしたみ使いたちの労をねぎらい、一層の感謝の思いを抱いて、この音信を聞くべきであるという意図があったのでしょうか。

これまでの、預言の伝達方法と同じく、即座に、音信を告げても、(その音信を伝えるに当たっての経緯などを一切省いても、)何ら差し支えないように思えます。

推論しても余り意味あることではないかも知れませんが、今回に限りこの異例な、見えない世界の情報が伝えられた事には、何らかの意味があるのかも知れませんが、名を挙げられていないみ使いの経験談そのものは、本来の預言の内容に、直接関わりがあるとすれば、時間的要素、つまりON TIMEであり、将来のいつかという「[預言](#)」のように、時間的空間的に「[取り分けられた](#)」1シーンではなく、今現在とこのまま繋がってゆく話であることを印象付けていると言えます。

み使いは経緯について話した後、「[末の日](#)」に関する本題に入ります。

「[見よ、なお三人の王がペルシャのために立つ・・・](#)」

この書き出しの部分までと、その前の経緯を含めて、時間的要素を考えますと。話しの流れは、「[今この時からカウントされ始めた](#)」と読むことができます。

「[末の日に起きる事](#)」と断って起きながら、話しの内容は、現時点からの連続した構成になっていることが判ります。そして、その後、ギリシャが現れ、4つに分かれ、その中から、対抗し合う、南の王と北の王が出現し、北の王は、荒廃をもたらす者を据え、イスラエルに入り、諸国民が押し寄せ、終わりに至る事。さらにミカエルが立ち上がり、聖徒が迫害され、「[定められた一時、定められた二時、そして半時の間である。聖なる民の力を打ち砕くことが終了するとすぐ、これらのすべての事もその終わりに至る](#)」。(ダニエル 12:7) という風にダニエル書の最後までずっ

と続きます。

この歴史の流れの全期間を指して「末日」と呼んだということはありません。むしろ、み使いの情報つまり、「これから、起きてくる事から、自分の死んだ後のずっと後の時代に至る時代の中での北の王の言動や、その顛末に関する情報こそが、「末日」に起きる事の意味を理解するための重要な要素である事を悟る。というのがその意味するところでしょう。分かり易く言うと、これらの情報があつて初めて「末日に起きる事」の本当の意味を理解できるようにされていると言うことです。その「末日に起きる事」というのは、エホバの日に「北の王」が滅ぼされた後に生じる、イスラエルにとっての喜ばしい一面のことでしょう。

「我が主よ、これらの事の最終部分（ヘ語：アカーリース；after-part）はどのようになるのですか」。すると彼はさらにこう言った。「行け、ダニエルよ。これらの言葉は終わり（ヘ語：カテス；end）の時まで秘められ、封印しておかれるからである。多くの者が身を清め、白くし、練り清められる。そして、邪悪な者は必ず邪悪に振る舞い、邪悪な者は一人として理解しないであろう。しかし、洞察力のある者は理解する。「そして、常供のものが取り除かれ、荒廃をもたらす嫌悪すべきものが置かれた時から、千二百九十日があるであろう。「ずっと待ち望んで千三百三十五日に達する者は幸いである。「そしてあなた自身は、終わりに向かって進め。あなたは休むが、日々（ヘ語：ヨーム；days,age）の終わりに自分の分のために立ち上がるであろう」。（ダニエル 12:8-13）

ここで、具体的にどんなことが生じるのかは敢えて伏せてあり、その記念すべきスケジュールだけが示されていますが、この1290日の意味する所、1335日に達して幸いを得るという出来事こそが、洞察力のある者だけには、「末日」（千年王国）の始まりにあつて、その期間の本当の意図や目的が理解され、その実質的な祝福を経験することによって悟る。ということであり、ダニエル自身もそれを保証された一人であるということでしょう。

それで、例外的に思えたダニエル書の2つの「末日」もやはり千年王国の祝福期間を指して用いられていると結論することができます。